

せ た か む い

発行・古平町史編集室
文化会館 842・2590
第186号・平成17・3・1

年表で読む 古平の歴史

《92》

古平のソイ漁 ー続きー

■ソイ類の生態

変わっているのは、広くこのソイの仲間はほかの魚類のように卵で生まれるのではなく、親の体内で受精し、仔魚（しぎよ）となつて出産することから胎生魚（たいせいぎよ）とみなされている。

ソイの餌になるのは魚類が最も多く、エビ・イカ・ゴカイ類などで、捕食される魚類はスケソウダラの幼魚、イワシ・サバ・ウマヅラ

ハギなどが多く、イカナゴは周年食べられている。大きな目で餌を探し、大きな口で何でもバクバクと食べそうだが、釣りなどでは、目の前に餌がこないといと食いつかないそうである。

※ 積丹町の草内にソイ釣り名人と
言われるおばあさんがいて、鍋をかけてから浜へ行き、おかずのソイを釣つて来るそうである。

ソイは棲家がきまつているから、そこを訪ねるだけだという。そこにいたソイを釣り上げると、二、三日中には、また代わりがちゃんとして入居しているの、自分の持っている穴場何か

河開	河豚	明治四五年	河豚の製品別生産高
脂	身		
豚	欠		
粕			
		三〇、〇〇〇尾	
		九三、七五〇*	
		四七、一三八*	
		三七石	
		三、二八五円	
		三、五三七円	
		六一〇円	

所かを順番に廻つてさえいれば、必ず釣れると言つ。釣り竿といえは、身の丈ほどの竹の棒切れである。

大事なことは、穴場はゼツタイ人に教えないことである。すべて頭の中にあるので、人にもれる心配はない。草内の海岸はこのおばあさんにとつてはソイの養殖場なのである。

古平のフグ漁

■昔はフグも魚粕

古平では「フグは菜の花の咲く頃にとれる」と言う。

フグ漁はその年によつて不同があり、昭和一〇年頃までは、その年によつて漁をしたりしなかったりしていたが、フグ漁はごく小規模で、漁獲高も少なかったのか記録がない。

明治三〇年頃までは定置網が使われ、かなりの漁があったと思われる。ひと起しでサンパ（三半船）一杯分もとれ、一尾一銭五厘であったという。当時の物価として、白米（一〇*）一円二〇銭、天どん五銭であった。

明治四五年の記録では、六月初旬からは延縄で釣ったとある。

延縄漁では、一人乗りの磯舟二〇隻が出漁し、漁獲したフグは《別表》のように処理されている。別表にある「身欠き」というのは三枚おろしにしたものと思われるが、昭和になつてからはすべて開きフグに加工されている。

■フグのないしよ話

余市豆本第4集（別巻）・辻敏さん著『試験場物語』の中の一節をご紹介します。

◇ ◇

「当時昭和一九年？、余市では定置網でフグが大量に漁獲されていた、関西方面では高価なのに、余市では魚粕にされていた。それで、関西のフグと余市のフグとではどこが違うのかその調査に出かけ、方々を試食し最後に有名な専門店で、当時の月給に相当するほどの金額でフルコースを食べたが、どれも同じような味だという結論になった。

そのとき世話になった、ある大手水産会社の所長さんにいろいろ聞いたところ、他言無用ということ、こんなことを話し

てくれたという。

『北海道から毎年貨車で二車(約二〇〇)大阪にフグが入荷する。そしてここから下関ものとして築地に輸送される。東京の安い居酒屋などのフグは全部北海道ものだ。』

あれからもう五〇年も経ったのだからお前に始めて話す、と言っていた。

最近いろいろな食材で、産地を偽って大きな問題になっているが、五〇年前にも同じようなことが行なわれていたのである。」

◇ ◇

いつの時代にも、どの世界にもホン物とニセ物の横行するのが世の常のようである。

古平のマス漁

■サケとマス

日本人は魚好きで欧米人は肉食といわれているが、サケとマス、

タラは別格で、戦前、北洋でのサケ・マスの缶詰は日本の輸出の花形でもあった。また、鮮魚として

その河川型のヒメマス、北洋のカ

が高い。

日本では「サケ・マス」といっしよに呼ばれることが多いが、学問上からもサケとマスはサケ科の中のごく近い仲間同士で、よく似ているから無理からぬことである。

サケとマスの語源について、江戸時代のある学者は「サケは筋肉が一片づつ裂けるため、マスはサケよりも味が増すためだ」と言っていた。

今から千三百年ほど昔の本には、サケを鮭または須介すけと書かれていて、鮭という字が使われたのは、それから二〇年ほど後である。現在でも大型のサケのことをマスノスケ(鱒之介)大将という意味と言っている。

昔は……といってもはつきりしないが、鱸の細かいサケ類をマスと呼んだことがある。そのためこれらを合わせて、ふつうサケ・マス族という。

ラフトマス、最も大型のマスノスケなどがある。
マスは地方によっていろいろな名前前で呼ばれ、戸惑うこともある。本によっても、一般にマスといえはサクラマス、というのと、カラフトマスのことなどある。
・サクラマス⇨ホンマス、イタマス、ギンケ、ママス、タイコマス
・カラフトマス⇨マス、ホンマス、アオマス、ラクダマス、カンマス
・マスノスケ⇨オオスケ、スケ

■マス漁の記録

古平でのマス漁について最も古い記録は文化七年(一八一〇)で、「鱸場鱸漁の船については無税だが、その場所(区域内)では一隻に限る。ただし、常夜灯、係留、書類にかかる代金は取り立てる」

鱸場は次ぎの通り

フルヒラ・ヒクニ・イワナイ・タカシマ・ラタルナイ・スツツ・インヤ(二一場所の地名があるが、後志周辺だけ)

鱸漁は資源保護のためか、次ぎ

のように隔年の許可であった。

鱸年 丑・卯・巳・未・酉・亥
休年 子・寅・辰・午・申・戌

その後、マス漁を業とする者がいなくなったのか、明治四五年までは記録がない。

明治四五年、一月から二月中旬まで、磯舟に一人乗り、曳き釣り、手釣りで二〇隻が着業して、一、一四三[〃]を漁獲し、うち九三七[〃]を、九〇円で生売りしたとある。他は自家用として消費する程度であった。

大正六年は九四五[〃]を漁獲、二一四円の売上げがあり、大正一〇年には二、一〇〇[〃]、九二四円で生売り、雑魚網でとれたマス三七五〇[〃]を四〇〇円で生売りした。

大正一四年の漁獲は四、五〇〇[〃]で、価格も一、四四〇円と最高であった。その後、着業する者も減少の傾向にあった。

古平では、マスは五月頃とれるのをサクラマス、イタマスといい、一〇月頃からとれるものをホンマス、一二月頃とれるのをトウジマス(冬至マス)、小形のものをアオマスと言っていた。

大正一二年

▼八月三〇日

熊さんから七時頃電話があり、イカ五〇〇程獲ったのと、大漁だ。早速、父と幸治が車に石油箱をつけて行く。家ではイカの始末に大忙し、近所へも配ったが、あとは裏へ縄を張り干した。正午頃から雨が降り出した、困ったことだ。皆でイカを家の中に入れた。

▼八月三一日

今日は珍しく快晴。昨日の雨で、イカを干すのに困っていたがちょうど良かった。これでどうにかモノになりそうだ。今日は旧暦二十日盆、入船町方面から盆踊りをする人達が沢山来て賑やかだ。

▼九月一日

起床五時半、板戸を開けて浜へ出て見る。熊さんは昨晚もイカ釣りに出たのだが、船は一里程沖に帆をかけて見えている。あと一時間もすれば入港するだろう。朝食後、悦三をおんぶして、川の浜へ見に行く。イカ釣りの共栄丸が入港して来た、今日は

一二〇から一五〇くらいだという。やがて熊さんの船も帰って来た。二〇〇余り獲ったのと、この頃から、また雨がポツポツ降り出し、正午頃からは大雨になった。せつかくのイカもこの雨では干されぬ。朝方、せつちやんから大阪に安着との電信が届いた。

▼九月二日

去る一日、東京方面で大地震

高野名幸作さんの日記から

[97]

当時の世相を見る

火災も発生する。三分の二を焼失、死傷者数一〇万人という大惨状を呈する。号外、新聞も大きく発表、国民は大驚愕する。

▼九月四日

起床六時、東京方面大地震のため、どこもその話でもちきりだ。人が三人集まればその話だ。新聞によれば損害は実に未曾有のこと。東京全市の大半を焼失し、死者一〇余万人あるとの

こと。外国人の不穏な動きもあることから、軍隊も出動し、神奈川には戒厳令が布かれる。

▼九月五日

起床六時、熊さんは昨夜イカ釣りに出たが、今朝は五、六〇と薄漁だった。午前中銀行へ行ったが、どこへ行っても東京方面の大災害の話だ。夜、部落会例会が私のところである。恵比須神社祭礼についての協議を

する。

▼九月七日

今日は珍しい暑さだ。熊さんは農園行き。東京の大災害で、こも仕事の手につかぬようだ。井上さんでは、函館から兩人が無事だとの電信が来たというので、私も無事を喜び挨拶に行く。涙を流して喜んでいた。夜、困に行く。やはりここでも災害の話だ。△仲谷主人が来て、組合書記

の件で話をする。阿波君を採用するかもしれないので、至急書類を差し出すと言われたので、私は早速阿波君へ手紙を出す。

▼九月八日

起床六時、洗面後浜辺を散歩する。海は静かで景色も良く、気持ちが良い。この地ではかくの如く静かだが、東京周辺は過般来の大災害で、どんなにか悲惨なことならん。かく平和に送られしわれわれは、幸福なことに感謝せねばならぬ。大川辺りまで散歩する。川縁の浅瀬に鮎が七、八尾、元氣よく泳いでいる。川に入って岸に追い込み、一尾をつかまえる。家に持ち帰ったがピンピンしている。朝食後新聞を呼んだが、東京方面の惨害の記事のみだ。井上さんでは、二人とも一時の船で帰って来るという。万死に一生を得たのだ。浜まで出迎える、家族も大喜びであった。夜、困へ行ったが例の災害の話だ。夕方から大雨で、大川では薪を流したところがあるという。

▼九月九日

今日も雨降り。東京方面の大

◀ 東京大震災の第一報を伝える新聞一ページ分の号外
 昭和十五年三月八日(舊三浦邸更勿認可)

東京日日新聞

第一 外號

大正十二年九月一日

(土曜日)

◀ 第一面の新聞タイトル(東京日日新聞・九月二日)

● 帝都に戒嚴令を布く ●

三百年の文化は一場のゆめ

ハカ場と化した大東京

災害は実に未曾有の大惨事だ。

寄るとこの話はかりだ。

▼九月一〇日

起床七時 ようやく快晴になつた。浜へ出て見たらシケ後で、浜には薪なども寄つてゐる。午前中銀行へ行き、帰り三に寄り姉と話をした。困の小林さん、去る二日頃から不快のところ、今日急に容態が悪くなつたので札幌へ行った。人間はいつ病気になるやらわからぬものだ。私も浜まで見送りする。小樽の佐原から大アバ縄二〇丸注文の電話

があり、勇丸に積むことにした。

▼九月一日

曇天、朝早く勇丸に大アバ縄二〇丸積み込むべく、三倉まで行く。大アバ縄三〇〇丸のうち大半が売れ、あと八〇丸程が手持ちだ。困小林さん、今日手術したとのことだ。なかなか重体で、ここと二、三日が大事とのことだ。泊の阿波君から返事が来る。早速、△の仲谷組合長のところへ行ったら、今朝北見方面へ出かけたとのこと、困つた。なかなか他人の世話も面倒なものだ。

▼九月一二日

朝夕が涼しく、白地では寒くセルがちようどよい。阿波君のところへ組合の件、返事を出した。珍しい快晴で、妻とコノさんは張り物をやる。佐渡から手紙が来る。東京にいた重夫さんが災害で避難していたが、衣類や行李などを持っていかれたとのこと。無事であつたのがせめてもの幸いかも知れぬ。小樽から細アバ縄四〇丸の注文がくる。値段は三二五まで勉強する。明神丸に積み込むことにした。イカ漁は皆無で町中はさびしい。大謀の漁も思わしからず、二の前に瀬戸物売りが来てゐる。夜は静かだ。

▼九月一三日

天気快晴、冬行き細アバ縄四〇丸を明神丸に積み込んだ。いっしょに岡崎へするめ少々送った。子供等は本陣の浜でガンゼ取りをして遊んでいる。

▼九月一四日

朝夕が涼しく秋らしくなつた。こちらは平和に安楽に暮らしているが、東京辺りの被災地の惨状はどんなだろう。気の毒

なことだ。④への網代一六〇円を送金し決済する。夜、△仲谷さんの奥さんから電話があり、かねて依頼していた阿波君の件、主人が小樽にいたので電話で話したら、早速赴任するよう頼むとのことだったという。私は喜んで、早速阿波君にこのことを報告した。阿波君も喜ぶことだろう。△鶴間に遊びに行き一時帰る。

▼九月一五日

今曉四時頃から雨が降り出し止まぬ。銀行へ行き、帰りに三に寄りしばらく話をする。この雨で涼しくなり、いっそう秋らしくなった。雨は夜になっていっそう強くなったようだ。このまま降り続けるようだ。大水が出るだろう。

▼九月一七日

小林さん、昨夜小樽瀬戸病院で死亡したとの通知あり、私は良一さん、困支店兄さんと三人で余市まで陸行する。八時半出発の小樽行きに乗る。大雨の後で、山中の道路はところどころ川のようになっている。困難する。

▼九月二二日

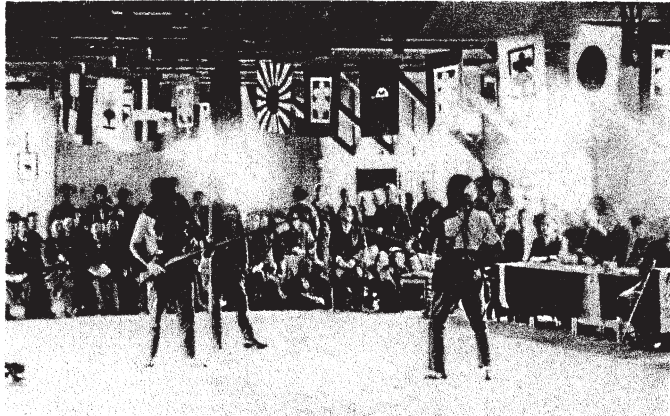
朝の内は雨が降り寒いこと、晩秋の景だ。恰(おそ)に半天を着てちょうど良い。港町山下玉五郎宅でセリがある日だ。仕事を頼まれていたので行く。午後一時から始まり九時に終わる。約一千円の売り上げがあり、帳簿整理をして帰る。私のところでもサキリ一〇〇本を三三円で買った。

▼九月二三日

一昨日からイカ漁があるようになった。三〇〇から四〇〇獲れた。秋風が吹いて一日増しに寒くなる。恰に半天(半纏)でちょうど良い。子供等はそれでも日中泳いでいる。昨年来の校門が、今日出来上がったというので見に行く。熊さんは金の船でイカ釣りに出かけた。

▼九月二四日

起床七時、朝夕の涼しさは初秋らしい。今日は後志在郷軍人連合会武術大会の日だ。七時頃花火が上がる。軍人連中がどんだん町を行く。私は悦三と父とで浜へ出て見る。昨夜、熊さんがイカ釣りに出たが漁は如何と



← 古平小学校で行われた
武術大会風景

待っていたら、電話で四、五〇〇獲ったから車がほしいとのこと。早速、子供等をやる。この好天気ですすにはよろしい。近所へも配ったり食べた外、四〇〇も干した。大漁だ。午後二時頃、学校へ武術大会を見に行く。大勢の人が見物に來ている。勇ましい。真狩別村が一等、古平は二等だった。五時に終了。

▼九月二五日

起床六時、熊さんは三〇〇程のイカを獲って来た。まず大漁の方だ。イカ干しの方もなかなか忙しい。正午頃から風に雨が交じり、海もシケてきた。今日は旧暦八月一五日、十五夜だが曇り空で月の出もない。二階へ月見の馳走を供えた。

▼九月二六日

起床六時、朝夕の涼しさは日毎に秋らしくなる。店は閑散大謀網も漁が思わしくないようだ。曇天だが秋季衛生検査日だ。午後から店を除き、家中の大掃除をやる。菊地船頭を頼む。私は一時から、山下の配当金についての清算に行く。六時頃ようやく終わる。私のところは、一五〇円に対し六八円、四半掛の入金があった。雨はますます降り、海も荒れている。

▼九月二七日

朝夕は涼しく、一年中で一番心地良い時だ。菊池船頭は今日も来て、二階と店の衛生掃除をやる。ゴミも、いつとはなしにずいぶんたまるものだ。正午までに全部終わる。熊さんは海がナ

ギてきたので、二時頃イカ釣りで港町へ行く。漁があつてくれればよいが、海産物のうち鰯粕の打撃は甚だしい。目下、一四〇〇円くらいだが、一〇〇石につき一、五〇〇円もの損害になるとのことだ。数の子も、今月に入り日増しに大暴落だ。一本につき三〇円から四〇円の損害とのこと。

▼九月二八日

朝七時頃から、風に雨が交じって海も荒れてきた。熊さん、昨夜イカ釣りに出たのでどうしたかと案じていたら、一〇時過ぎに帰る。イカは三〇程しか獲れなかった。延縄をやったからタラ、ギス等が掛かったといつて持ってきた。月末で目録書きをやる。

▼九月二九日

今日は珍しく快晴、秋晴れの心地よい天気だ。本年は大謀網が思わしくなく、一向に景気は引き立たぬ。美国、白川大謀では、去る一五、六日の大しけで網を全部流失、一万円余りの大損害を受けた由、小樽では二一〇〇〇円余りの貸し付けがある

というので、取り立てに来て帰り店に寄った。山下のセリで買ったサキリ欲しいというところがあり、一〇〇本のうち、五〇本を三八銭で売る。一本で五銭の口銭があった。この分ならもつと買い付けておけばよかった。妻等は農園へアズキをもぐに行つた。

▼九月三〇日

起床六時、早々に浜へ出て見る。一、〇〇〇トぐらいの汽船が一隻入港している。せっかく期待していた数の子も大暴落で、海産商は大打撃だ。鰯粕で大損害を受けたところへ数の子での大損。海産商は皆致命傷を受けたようだ。町中の不景気も近年にない程だ。秋晴れの好天気、妻は子供等を連れて今日もアズキもぎに行く。熊さんは月末なので掛け取りに行く。

▼一〇月一日

秋晴れの快晴、妻と熊さん等はアズキもぎに行く。父も気分が良いとて、ワラシ掛けで午後から行く。海産商連の損害は実に莫大だ、何れも大打撃だ。われわれは大したものではないが、

こんな時には心配もない。家内中そろつて無事で過ごせるのは幸いと感謝せねばならぬ。夜、学校で東都震災実況報告演説会があるというので行く。話は余りにも長たらしくて、話の内容もくだらないので途中で帰る。〆に寄りいろいろ話をして一一時帰る。

▼一〇月二日

起きた頃は曇り空であつたが、七時頃から雨になる。イカ漁も近頃は思わしくないようだ。午前中、床屋で散髪する。帰つたら昼、この頃は日の暮れるのも早くなり、日が短くなった。困支店へ行き、火防組合経費を納める。居合わせた横山君、尹さん、外二、三人と時事についていろいろ話す。二時頃から急に大雨になる。

▼一〇月三日

未明の五時頃からあられが降り、いよいよ秋になったか。床の中でぬくぬくとしていられるのは幸福なものだ。起床後、悦三をおんぶして浜へ出て見る。古英丸と発動機船が二隻、外に七、八百ト級の汽船一隻が入港して

いる、避難船らしい。八時頃にまたあられが降る。熊さんは薪割りをする。妻は午後から、雨の晴れ間にトミとキノコ取りに行く。夕方から雨になり寒風、初冬。

(続く)

喜びの新発見

昨年の八月号の「高野名幸作さんの日記から」(四ページ最下段)の中で、大正十二年三月二十三日の卒業式にふれられ

『卒業生の答辞は長尾貞二郎君であつた。長尾君は口答で答辞を述べたが、新しいやり方だ。……』との記載がありました。

若しや稲倉石郵便局の長尾局長さんではと気にしていたのですが、先日、函館に居られる娘さん(鉱山で事務員をしていました)に電話をしましたところ『たぶん父だと思えます』との事でした。

お父さんの小さい頃を知る貴重な記録になるでしょうから、記事が載っている「せたかむい」を送りました。

早速、はずんだ声で

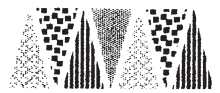
『父に間違いありません』

との、喜びの電話がありました。

高野名さんの日記は、毎号興味深く読んでいますが、今回は喜びの新発見をさせて頂きました。

ありがとうございます。

(富山・高橋藤蔵)



海雲(もずく)と「高足」の膳

大 澤 文 子

暦の上では立春を迎え、恒例の節分の豆撒きも終わりを告げると、春を待つばかり。

枯木の合間より時折りのぞく淡い太陽の光りに、行き交う人らのつぶやきも明るい。

そんな時、ふつふつと遠い想い出のかずかずが蘇り、暖かいものが心の中を走る。

「おーい！ ねえさん持ってきたよー」

朝早くに元気のよい、いつもの若者の声が裏木戸をたたく。慌てて錠をはずす。

「ホラホラ！ 海雲だよ！」

日焼けた若者の笑顔が、手籠に山盛りの海雲を差し出す。

「わあーすごいねえ！ ありがとうネー」

「ヤママスさんの浜から採ってきたんだよ」

「ホント！ いつもありがとうネー」

礼を言う私の言葉もそこそこ

に、若者は逞しい背を向け、いつも走り去ってしまう。

採りたての海雲はおいしい。

早速熱湯にとおし、鮮やかな緑色に化したものを、酢と少々砂糖で味つけをする。

海雲の酢ものは舅(ちち)の大好物。いつも朝食の一品として小皿に盛る。

舅は「高足」の膳で食事を摂る。甘からく煮た、捕りたての身の厚い鰯をひと切れ、卵は黄身のみ、海雲の酢のもの、その他若布の味噌汁とご飯。

簡単な朝食だった。舅の箸のすすむのを見守り、ひそかなうれしさをかみしめたのもその頃であつたろう。

昭和二十二、三年の頃は、卵もなかなか自由に求めるのが私にしては大変。なかなか漁業の町には慣れなかつたので、やつと古平橋のたもとの鶏を飼っていた家にゆき、遠慮しながら三

個、四個とわけてもらったものだった。今でも思い出すと、一瞬切なく胸が痛くなる。

またあの頃、遠浅になった岩場に、寒海苔を採る主婦達が三々五々、絶え間なく賑わいを見せていた。ご多分にもれず姑

(はは)も海は大好き。

いつもより早起きして磯へ出かける準備に忙しい。手がけ、長靴、鮑の貝殻等々、私までが姑のお手伝いで、広い土間を走り廻る。だが、姑の元氣な笑顔を見るのが嬉しかった。

採りたての寒海苔を、トントんとまな板の上できざみ、半紙大のスタレに伸ばして干す。その作業も大変な事とは思いますが、姑の顔はいきいきとして余念もなかつたのであろう。

時折り姑の妹、三浦ヒデおばあちゃんも手伝いに見え、低い声で何か話し合い、笑い合う姿を「いいなア」と、好ましく、いつもそつと眺めていたのだった。姉妹つて、年齢を重ねるたびにますます仲良く、いいものだなアと幾度思ったことか。

干し上がった海苔を一枚一枚丁寧にまとめ、箱に収めている

姑の姿を好ましく眺めホツとしたものだった。

ただ、冷たい海水だらけの広い土間の後始末は私の仕事、かじかむ両手に……足に、つらかつたなア。今でもひとりごとを言う自分だった。

あーあれから幾十年経ったであらうか。ふーっと朝の鏡にむかい、笑顔をつくつてみた。

ああ春も近いなア、

今でもあの海岸沿い道の崖下に、淡い紫のカタクリの花が咲くであらうか。一気に冬ごもりから解放される喜びに、思わず「さくら」の歌を口ずさみ歩いたことを覚えてる。カタクリは百合科の多年草、花言葉は「初恋」……とか。

また、浜通りに咲く浜ヒルガオの花も嬉しかった。

ところ嫌わず伸び放題の蔓、緑葉のかげに薄桃色の花、

「いいなア」手折ってグラスにでも……と思うが、あまりの可憐さにそつと触れてみるのみ、心から私を慰めてくれた花々。

その時季も、もうすぐ。

「浜辺のうた」でもピアノで弾いて待とう……か？

◇一〇か年計画終了

明治七年、黒田は第三代開拓使長官となりましたが、明治一四年までの八年にわたって長官を務め、歴代の長官としては最も長期間になります。

黒田長官はその後、明治二九年には、暗殺された初代首相・伊藤博文に代わって第二代首相となりました。

黒田が次官当時に策定した一〇か年計画は、明治五年から始まり、同一四年で成しとげましたが、この間の費用は実に一、四〇〇万円という巨額のものでした。それで、この事業を継続するかどうか問題になりましたが、この国事多難の折に一地方へ多額の資金を支出することは出来ない、ということとで規模が縮小され、政府ではこの時点で開拓使の廃止も考えられていました。北海道の開拓は民間の力のある者に委託し、政府はこれに相当の補助を与える方が得策であるということです。

ところが、ここに政界や財界に大きな力を持ったひとりの豪商がこれに目をつけ、北海道

の官有物の一切を三〇万円で、しかも三〇年賦の無利子で払下げてほしいと願い出て、それに黒田長官が同意をし、書類を政府へ提出したのです。

官有物となると、各港にある船舶・倉庫・敷地をはじめ開拓に関係する物件は勿論のこと、札幌のビール醸造所・ぶどう園・ぶどう酒醸造所・牧場・練や鋼、オットセイ、ラッコなどの漁業権、その他官有物と名のつ

んだこの問題は願いが却下されたことから、紛糾した事件も終りを告げました。

その後、大隈重信や板垣退助など自由民権運動を主張する人達が、この事件を口火に猛烈な国会開設運動を起こした結果、明治二三年を期して国会を開くことが宣下されました。

なお、開拓使は明治一五年二月をもって廃止され、北海道は※三県時代となりました。

蝦夷地から北海道へ 地方自治の移り変わり

くもの全部となるので、おそらくその価格は三、〇〇〇万円以上にもなり、しかも三〇年賦で無利子というのでは不当とか言いようがありません。

これが閣議に取り上げられたとき、猛然として大反対したのが大隈重信でした。そして政府内からも強硬な反対意見が相次ぎ、有力な新聞もこれを非難し始め、世論も後押しをしました。やがて、政界をも巻き込ん

※開拓使を廃止して、札幌・箱館・根室の三県を置くというもので、明治一九年の北海道庁設置まで続きました。これについては後で取り上げます。

◇開拓使と五稜星

開拓使時代に徽章（きしょう）として、北辰（北極星）をかたどった五稜星のマークが使われていました。これは明治五年開拓使艦船旗として初めて使

われたものですが、この図案は、当時、官営工場の製品のレッテルや、建物の装飾などに盛んに使われていました。

← 常用旗章ひな型



開拓使本庁舎が出来ると、白地に赤く染めた五稜星の旗が庁舎に掲げられ、出先機関や官営工場で使われたほか、このマークは開拓使の消防、学校、病院、屯田兵の旗章や服などにもデザインされるようになりました。

このマークが※サツポロビールのレッテルにあるのは、開拓使時代の官営ビール工場であったものを後に払下げを受け、民間企業として現在に至っているという歴史でもあります。

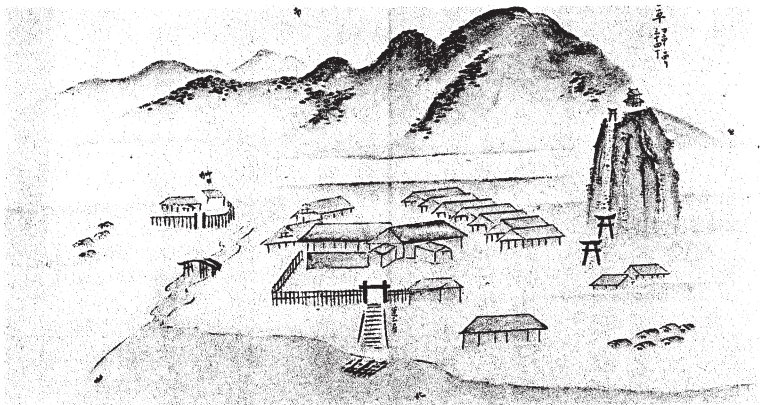
※サツポロビールは名前の通り札幌とのかかわりは古く、始まりは明治九年（一八七六）に開業し

開拓使直営の札幌麦酒醸造所です。開拓使が廃止になった後、明治一九年（一八八六）に北海通庁に移管になり、同年、東京の大倉組に松下げられた後、渋沢栄一らが買収して、札幌麦酒がスタートしました。明治三十九年（一九〇六）札幌麦酒、旧日本麦酒、大阪麦酒の三社が合併して大日本麦酒が誕生しましたが、第二次世界大戦後に分割されて現在のサッポロビールとなりました。

◇古平御用所

徳川幕府の時代には※箱館奉行所が置かれ、古平郡には古平御用所が置かれていました。

御用所の役目として、旅行者や出稼人の取締りがあり、次ぎのような文書が残っています。



→ 古平連上屋周辺の
絵図

中央かんぬき門のあるのが連上屋、向かって左の建物が御用所、右側の高台にあるのは恵比須神社（現在の厳島神社）安政六年（一八五九）に描かれたもので、原画は色彩画です。

↑ 古平御用所が発行した越年役免除書

慶應四年辰年より永住越年役免除

百式拾兩

古平永住

江差茂尻村

久七

当辰三十九歳

辰 古平

正月 御用所 ㊦

※箱館奉行というのは、幕府や松前藩が、箱館や蝦夷地を治めるために設けた職名で、その時期によつて役割がそれぞれ違っていました。

また、役所の名称もその時期によつて変わりましたが、蝦夷地に接近してくるロシアとの問題があり、箱館が開港場となると、欧米との交渉の窓口として重要性が増し、箱館奉行は京都・大阪・長崎奉行よりも格式が上席とされました。

やがて明治元年、新政府はそれまでの箱館奉行所を箱館裁判所と改めましたが、榎本武揚らの旧幕府軍が五稜郭を占領して、国内の戦火はまだ収まっていまませんでした。

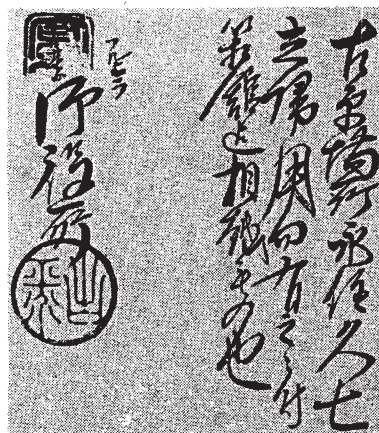
※ 平成一六年に、箱館奉行所の文書類が国の重要文化財に指定されました。このような行政関係の文書が国の重要文化財に指定される

というのは、全国でも三番目だという事です。

◇古平御役所となる

明治維新からあわただしい新政府の国づくりで、国内の制度は次々と目まぐるしく変わり、古平御用所は古平御役所となりました。

← 明治二年古平御役所発行の通行手形



古平場所永住久七立帰用向有之候付箱館迄相越もの也
フルヒラ御役所 ㊦
巳七月廿七日

当時は、内地（本州・四国・九州など）から北海道へ来るためには、檀那寺（だんなでら＝菩提寺）か名主（庄屋）、戸長などからの、通行手形とでもいう書き付けを持たなければなりませんでした。

— 札幌通信 第27信 —

雪まつりの終るころ

吉 川 義 雄

同じ病気で、同じ病院に、ま
たも入院してしまった。

「脳梗塞」と宣告されて、二十
日程入院したのは、今から五年
程も前のこと。病人らしく当初
はベットに横たわっていたが、
リハビリの段階に入ると、何
もかもやるのが常人と一緒
ぐらい。

一番悪かった左膝の関節も、
何の不自由もなく運動できた。
始めての病気である。脳梗塞を、
完全に小馬鹿にしきつて退院
してきたことは確かである。

その後、特別の通院もなく、
特別の訓練もなく、病院は次第
に遠のいていた。

何事によらず、やたら神経質
になる必要もないが、さりとて
私のように、無神経極まる類い
も、時にはひどい目にあうハメ
になる。

一度やった病気は、病気にと
つて、周囲の環境さえ整えば、
二度でも三度でも発症するく
らいワケはない。

最初に発症した時は、私はま
だ余裕のある七十歳台。やるこ
とにまだ若さがあつたが、口は
達者でも、何をやるにもヨタつ
く八十歳台となれば「脳梗塞」
の方も、以前のカタキ討ちのよ
うにイジメつけてくる。

脳内の一ヶ所を塞ぎ止めて
いた血流を再び流すのには、高
圧の酸素を、これでもかと圧縮
したカマの中に一時間半程も
入り、約1週間か十日程それを
続ければ、たいていの梗塞は消
えるようだ。

何せ、脳内の一ヶ所以上の血
流が止まり、さなきだにパッと
しない頭が、更にドンになるの
だから恐い。

人間、まだ考えられる内はい
いが、自分で何をしているのか
分らなくなったらオシマイだ
ろう。

三月号の『せたかむい』に、
原稿を送らない内に入院して
しまったことをベッドの上で
気付き、常日頃の心がけを盛ん
に悔やむ。

そういえば「雪まつり」、年々、
大きい雪像が思いがけない姿
で並び、世界の国々との係り合
いを披露してくれている。

毎年のことだが、二月の雪ま
つりが終わり、大通りの雪像が、
見ている者の悲鳴と共に崩れ
て無くなるなると、春がすぐそ
こまで来ていることに気付く。

雪まつりと同じ頃入院し、雪
まつりが終わらない内に退院
できたことに感謝。

今夜は、TVが夜の「雪まつ
り」関係を、全道からひろい集
めて放送しているようだ。

夜の氷や雪は、どんなに光を
当ててもTV画面では美しさ
が半減され、本体が理解出来な
いものだ。若い頃、一度、雪像

づくりをしたので、よく分つて
いるから余計な心配もしてみ
る。結局、雪像というの、自
然と一体となつて創る喜びを
味わうものであり、創る楽しさ
は、創った者でなければ分らな
いだろう。

銭湯に行つて、裸像の動きや
筋肉のありようなど、熱心に観
察して参考にしたものだ。

きれいに仕上げて置いた足
の指を踏みつぶされ、犯人探し
の方が忙しい者もいた。

雪像は大なり小なり、子供の
頃から雪国の人達は触れ合つ
ているから、特別のものではな
いが、いくら懸命につくつても
短い生命であることを知って
いるから、その分を大切にする
のかも知れない。

病気も、短い生命のありがた
さ、美しさをほんの少し知らせ
て、やがて同化するであろう。
大宇宙に入るための諸々の用
意を、ほんの少しだけさせても
らう貴重な時間かも知れない。
大事にしよう。

山中に陣地構築し続く

豚舎の中を仕切つて分けて飼うことにした。

これでやれやれとひと安心をしていたら、ある休みの日のこと、突然、「ゲオー、ゲオー」と豚舎の方から悲鳴が聞こえてきた。

急いで豚舎に行つて見ると、オスが豚舎の中仕切りを押し倒して乱入している。すると、二頭がドスンと開き戸に体当たりしたら、頑丈な開き戸がバタンと倒れて、そこから二頭の豚が一目散に戸外へ飛び出して行つてしまった。豚公のヤツ、久し振

りの解放気分です。山の中をあちこち走り回っている。山の中へでも逃げ込まれたらそれこそ一大事と、急いで中隊の幕舎へ

行き、豚召し捕りの応援を頼んだら早速、大勢が出て来てくれた。

豚のヤツ、大分興奮している

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

27 橘 義 春

「ゲオーゲオーッ」

と悲鳴を上げながら大暴れ。そしてつかまえた彼の太腿目がけてガブリとかみついた。

「イテ……」

彼は思わず手を離してしまつた。

このままではどうにもならないので、円陣をそのまま移動しながら、豚公のヤツを豚舎に追い込むことにして、円陣を次第にせばめていった。ここにいたのは豚公のヤツもさすがに観念したか、豚舎の中に逃げ込んで行つてしまった。早速、開き戸をもつと頑丈なものにし、豚舎の中仕切りも丸太も付け替えた。

噛み付かれた彼の太腿を見たら、紫色の大きな歯形がついていた。さぞかし痛かつたろうに——。まさか豚が噛みつくなんて思つてもみなかった。

これで、中隊を騒がせた豚の捕物騒動もどうか一件落着となつた。毎日が緊張した、厳しい生活の中でのひとときの珍事であつた。

炊事の掘つ建て小屋も楽しいものであつた。予備役召集の後藤兵長は国に奥さんと子供さんがおり、夜ともなるといろいろと人生観なども話してくれた。同年兵の川口ラッパ手は外国航

路の船乗りで、シンガポールや南洋方面の話などを聞かせてくれた。初年兵の加藤は演歌が上手で、東海林太郎のような声で『名月赤城山』を得意としていた。

夜になると、大西軍曹もちょくちょくわが掘つ建て小屋を訪問し、皆の話の輪の中に入つていた。何にもないので、たまにおこげのおにぎりを出すとうまそうに食べていた。何しろ中隊の皆は重労働で腹を空かしているのに、炊事にいれば特別うまいものがあるわけではないが、空きつ腹を抱えることもない。

これではラッパに大いに感謝しなければ罰が当たる。相棒の加藤は機転の利く働き者で、私の洗濯物まで手伝ってくれる。いい相棒だ。

日曜日に食糧の配給があつたので、各班から初年兵を二名ずつ出してもらい泉部落の大隊本部へ受領に行ったが、うちの中隊が一番遅く到着したので大分待たされた。

△ 続く △

連作

古平まで

15

坂本甚衛

—地質調査の旅(3)—

余市橋の本文に入る前にいささか唐突だが、新劇の名女優で演出家長岡輝子の自伝から「余市にて」と題した短い詩を見付けたので紹介したい。

(彼女は詩人でもある)

太平洋戦争中、移動公演で来町した時、黒川町の劇場(銀映座だったか?)から眺めた余市橋が詩情豊かに歌われている。

日本の辺境でしかない後志の一地方を歌った詩など、そう滅多にあるものじゃなからうと思うが故に……。

× ×

「余市にて」

ああ 窓を開け放して風を入れよう！

遠くのほうに目を向けよう
そこには風雅な長い木の橋が

唐もろこしの畑の向こうに
白く光る長い川を越えて
優しいお母さんの腕のように
のびている

× ×

余市での宿泊先は、妻の実家の遠縁になる大乗寺近くのしもた屋にした。妻を行かせ頼むと快諾してくれた。しかも意外と親身になり、旨い食事を供してくれる毎日だった。一緒に泊まった同僚の平尾が、いみじくも言った。獲れたばかりのホッケを開き、一夜干しにして焼いた熱々の物を食した時のことだ。「こんな脂ののったホッケの旨さは、アキアジなんか較べ物にならない浜の醍醐味だよね」

札幌育ちの彼は満腹の腹を撫でた。山里生まれで、生来魚のあまり好きでなかった私も、その味には成る程と頷き、巷間の

食通に流布した言葉の重さを知った次第であった。

平尾は拓銀の監査役を父に持ち、東京工大出身で、私より二歳年下の良家のぼんちだが、工大のあった東京大岡山の近くは私も一時住んでいた時期があり、洗足池の周遊話から花が咲き親しくなった友人であった。

父親譲りの金融業には目もくれずエンジニア一筋の若者だけあって、鴨々川近辺の彼のアパートへ行くと、自分で真空管から組み立てたラジオやステレオ、軽量材のバルサで造り小型のエンジンまで着けた模型飛行機や、モーターボートなどがわんさどあった。

仕事の合い間に講釈し、引いた図面を元に説明してくれたローターエンジンなどの点火運転の原理は、後にトヨタやホンダで実用化され、世にも優れた先見の明ある人物が確かに存在するものだなど、私を瞠目させた一人であった。

内実、彼を見習わなければならぬと感じた点はこうした優れた頭脳は元よりだが、何事も果敢に追求しようする本質への挑

戦ではなかったか。

特に地質、地層という普通目にする機会のない地下の未知の世界には、どんなぶよぶよした絹漉し豆腐みたいな地盤や、または活断層、或は鋼鉄級のとてつもない硬質な岩盤が立ちはだかつているか、知れたものじゃないからである。

妻の遠縁のこの家を宿にしていたおよそ二十日余りの間に、私は伝手を辿って貸家を捜した。駅に近い旧黒小向かいの国道を挟んだ一面に借家を借り、移る経緯になったのはまたあとの話である。

ところでこの現場には、私と平尾の他に白岩町から連れて来たもう一人の作業員がいた。

名前を加我谷と言ひ、白岩町在の漁師の次男坊である。白岩での岩質調査の際に頼んだ人夫だが、私らと同年代で寡黙な割りに目はしがきき、使用する側としては極めて使い易いたちの人間であった。

岩質調査の終わりに近くに、「どうだ。余市橋へ行かぬか」と冗談混じりに言うとう、「行く」と言う。

酒が好きだ。酒を呑み、語らうのが好きだ。酒に酔い、人に心酔するのが心地よい。酒は高ければ良いというものではない。昔で言う「二級酒で充分だ。目下、「松竹梅」の上撰に惚れ

良くなければ美酒も空しいものだ。酒を一人で飲む歳はどうに過ぎた。互いに喜び、時に涙して飲む酒こそが、甘露というもの。

— 六百字エッセイ —

さかみずき〈酒宴〉

小川 光 男

込んでいる。余程の酒飲みと思われているのか、さまざま酒を頂戴するが、吟醸酒の類は合わないようだ。

酒好きの父が七十八歳で逝った。その四、五年前から「酒が不味い」と言っていた。体調が

う純米酒を頂いた。北海道の水と空気と米とで、それを掛け替えないものとして留めている若者たちが造った酒だそうだ。早速、燗をする。「辛口のように」と家人は言う。ラベルに、常温以下で飲むと美味しいとあ

編集雑誌

▽バス停で待つ人たちの話題は、決まって例年がない大雪とさっぱり漁の無いこと。車内は学生と病院通いの人たちが満席。新人生も軒並み減る中で、古平高校が昨年よりも入学志願者が増えました。これは明るい話題です。

▽豪雪もさすがに三月の声をきくと、このあたりがピークでしょう。新潟の災害地周辺の雪を見ると、

る。外道と言われても、熱燗もいける。

「酒は燗をして、肴と飲め」この養父の口癖を、なぜか守ってきた。銚子二本、約三合を「電子レンジで二分三十秒」が

我が家での秘訣。廉価な酒でも、電磁波で旨い酒になると思い込んでいる。古来、燗酒とは重陽の節句から、ひなの節句の寒い時に温めて飲むものとされていたようだが、我が家は年中熱燗なのだ。

「四畳半の宴」とまではいかぬが、家人と二人の晩酌は、野菜と魚をとりあわせ、他愛のない会話の肴が心を酔わせる。この「さかみずき」が、私には何者にも替え難い。

ります。ありがとうございます。

▽冬至の頃の早朝、文化会館から見ると沢江の山から昇ってくる太陽が、ちょうど吉田一穂記念碑の上辺りに見えていました。このごろは大分東寄りに見えるようになります。季節は春近し——というところでしょうか。

▽本陣の浜で、海藻を採る人たちを見ると気も和みます。『北海道俳句の旅』に古平を詠んだ句、沖荒れて歌棄の浜荒布寄す

沢町に親戚があり、そこに泊まって通うから連れて行ってくれと真面目である。それならというわけで、彼は毎朝沢町からバスで通って来る仕儀になったわけである。

私と平尾は宿で弁当を造ってもらい、おにぎり持参の加我谷と三人、橋の袂にある老夫婦宅の茶の間で昼食をとらせてもらうことにした。

他に老夫婦を介して近所から人夫を二人雇入れ、到達した機械類を日通の馬車に積み込み、橋側の試験現場へ運び入れた。

地質調査といっても、私や平尾みたいな担当者とは別で一刻も頭の休まる余裕とてないが、普通の人夫が少しばかり忙しいのは機械の組み立て時ぐらいなもので、いざ運転が始まると暇で仕事も注油ぐらいしかない。極めてノーテンキと言ってよい。

おまけに私みたいな気弱な人間は用事があっても、それをやってくれ、と自分より年上の人に頭ごなしにはなかなか言え難い面もあった。



古平俳句会

師の教へ心に刻み去年今年	斉藤波留
初日の出金波銀波の波がしら	山口悦子
風雪の海鳴り遠く聴きにけり	越野敏雄
寒鰯を小さき包丁捌きけり	大和田絵伊
凍て川面底に水音ありしかな	高橋重子
岩頭を撫で去る風や冬ざる	仲谷比呂古
大漁の二文字秘めて初の風	室谷弘子
正月に集ひし子等の元氣見る	泉清三
寒行の町に流れる般若経	外山俊久
切り立ちし岬の断崖雪寄せず	渡辺嘉之
寒風や哭くごとき音伴へり	堀典子
舳先打つ初日きらりと貰ひ波	本間寿昭
吹雪止み積丹岳の峙てり	越野清治



古平町岬短歌会

雪ぐにの人も戸惑ふ大雪に聞こえる除雪車只ありがたし	池田テル
音切れて始動せぬわが除雪機に隣りが向ひが見に来てくるる	鈴木時子
野も山も日日大雪に見まわれて一人暮らしの淋しさ募る	竹内コト
凍れとけ開きし窓ゆ春の風こそその風鈴清しく鳴らす	丹後初江
旅好きな友の病ひの厚くして旅語りつつじゃらん誌を見る	寺内りよう
冬半ば過ぎしと仰ぐ空曇り太陽のあり処おぼろに見ゆ	東美知
海よりの風強ければななかまど朱実を道辺の雪に散らしぬ	堀典子



教科書のいまゝむかし

◇復活した教科書

新しい教育には新しい教科書——ということ、欧米のものを翻訳した教科書が多く使われるようになってきました。

理科の教科書について見ますと、『物理訓練』とか『天変地異』などといったものがありました。これらも欧米の本からの翻訳で、その紹介といったものでした。

当時、学術の面で最も遅れを感じていたのは技術面や自然科学面で、理科教育には力を入れましたが、それは「科学する心」を養おうというものではなく、出来上がった科学的な知識をそのまま紹介したものでした。

これは江戸時代の有名な学者であった佐久間象山の唱えた「東洋の精神、西洋の芸術(科学技術)」がよいという、和魂洋

才(わこんようさい)という思想が、指導者の考え方を支配していたからです。

その中の一冊『天変地異』は、自然に起こることの法則をやさしく説明して、一般の迷信をなくしようとしたものです。その中には「雷除けのこと」「地震のこと」「彗星(流れ星)のこと」などについて書かれていて、「昔、知識のなかった時代には、雷は悪い神が叫んでいるといつて人々は恐れていたが、フランクリン(フランクリン)＝雷の正体は電気であることを証明した」という人が出て、雷の正体を正しく説明できるようになった。また、雷を避けることのできる道具(避雷針)も出来て、人々の幸せも限りなく広がった。

◇道徳の中心に孝行

ところが、明治十三年の改正教育令によって、今までの教科

の順位では最下位にあった修身が、逆に教科のトップにおかれるようになり、これまでの、欧米の自由思想を取り上げていた教科書は廃止されることになりました。

このような考え方に對して、福沢諭吉は『極端論』という本で大いに反論しましたが、国家権力に對しては効果がありませんでした。

明治十三年、文部省から新しい修身の教科書が発行されましたが、これには、まだ少しは欧米の影響も残っていました。が、全般的には、江戸時代に盛んであった儒教(孔子の教)の考えに立った道徳色の濃いものでした。

そして、明治十六年、文部省の『小学修身書』になると、もう欧米人の書いた本や人名、格言などはすべて無くなって、その代わり、先に出ていた『論語』や『孝経』などを取り入れたものが多くなってきましたが、そこでは何よりも「孝行」が重視されていました。

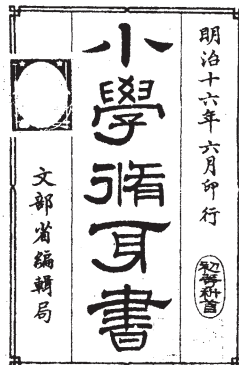
「人の行なうべき道は種々あ

れども、孝を以つてもつとも大切なものとす」と教え、「孝は徳のもとなり」という『孝経』の言葉を掲げています。

なおこの時期の修身の教科書には、菊のご紋章を浮彫りにしたものもありました。

← 小学修身書

人として穉き時より父母に孝をつくすを以て第一の勤めとすべし、父母に孝なるものは自ら其外の事にも道あるものなり
孝は徳のもとなり 孝経
人の行なふべき道は様々あれども孝を以



小学修身書首卷

人として穉き時より父母に孝をつくすを以て第一の勤めとすべし、父母に孝なるものは自ら其外の事にも道あるものなり。

孝は徳のもとなり。孝経

人の行なうべき道は様々あれども孝を以

古平町史年表

昭和 1 1 年 (1936) ～ 続 く

- ▲ 観音滝参詣に大勢が集まり、参詣人に鮭鍋などが振舞われる
- ▲ グランドの地ならし作業に、小学校高等科の生徒も勤労奉仕をする
- ▲ 積丹半島振興協議会（古平町・美国町・入舸村・余別村4か町村で結成）が古平町役場で開かれる
- ▲ 古平小学校同窓会評議会で青年道場の建設について協議し、費用は学校林を売却することで支庁へ陳情する
- ▲ 稲倉石鉱山のマンガン鉱の産出高が目標の年産2万トンを超え、産出高が日本一となる

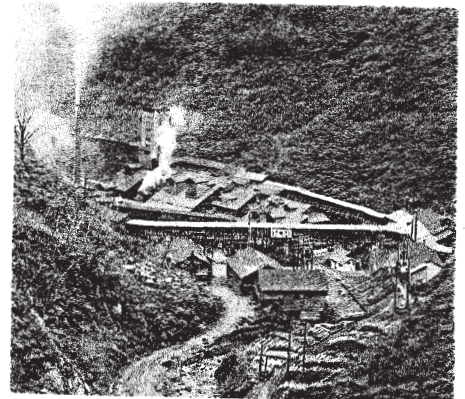
昭和 1 2 年 (1937)

- ▲ 江差からスケソ漁に来ていた漁船1隻が時化で沈没し、乗組員1人が溺死する
- ▲ 古平・美国小学校対抗スキー大会が美国町で開かれる
- ▲ 先に『北方詩謡』を創刊し、民謡作詞家でもあった郷社琴平神社宮司武内白雨（本名・武内真之）が死去する
- ▲ 古平尋常高等小学校で地久節（皇后陛下誕生日）の祝いがあり、裁縫室でダンスや朗読、唱歌の発表などが行われる
- ▲ 浜町で天理教主催の映画が上映される
- ▲ 全道漁業組合長会議で機船底曳き網の全廃を決議し情情するが、底曳き網業者が猛烈な反対運動を起こす
- ▲ 余市～古平間の道路開削のため、札幌土木事務所から技師が来町して雪中踏査をする
- ▲ 浜町で6歳の少女が増水した川に落ちて溺死する
- ▲ 美国町で大火（70余棟を焼失）があり、国防婦人会員が禅源寺で炊き出しをする
- ▲ 稲倉石小学校校舎が新築になり移転する
- ▲ イワシ網漁の漁船が帰港中に魚網の片寄りから転覆し、乗組員2人が溺死する
- ▲ 町営グラウンドの整地が完了し、中島グラウンドと命名され修祓式が行われる

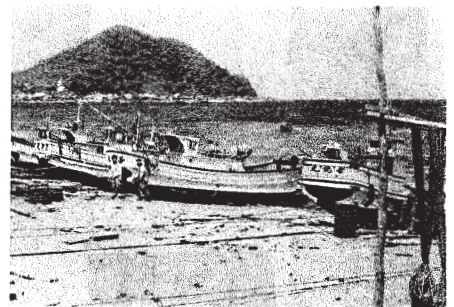
→ 観音像を安置した、岩に掘られた穴の跡



← 観音滝参詣の記念撮影



↑ 昭和 10 年頃の稲倉石鉱山全景



↑ 本陣の浜：イワシ網漁の漁船